

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北アメリカ極北先住民の食文化と社会変化：
カナダ・イヌイトとアラスカのイヌピアットを中
心に：2009年度第22回研究大会講演記録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4846

2009年度 第22回研究大会 講演記録

「北アメリカ極北先住民の食文化と社会変化

—カナダ・イヌイットとアラスカのイヌピアットを中心に—

日 時：2009年11月15日（日）

会 場：実践女子大学香雪記念館

特別講師：国立民族学博物館・総合研究大学院 岸上伸啓先生



岸上伸啓先生

1. はじめに

私の研究のおもな目的は、カナダに住んでいるイヌイットの人びとや、アラスカのイヌピアットの人びとの現代の生活様式を文化人類学的な視点から記録に残し、分析することです。1984年からカナダ・ハドソン湾沿岸の村で調査をはじめ、その後1996年から都市に移住したイヌイットの人びとの生活についても研究を進めてきました。数年前からは、今でもホッキョククジラを獲って、それらを食料としているアラスカの先住民イヌピアットの捕鯨文化について研究を進めています。

今回は、カナダ極北地域とカナダの都市に住んでいるイヌイットの人びと、そしてアラスカの捕鯨民イヌピアットの人びとを事例として、彼らの生活や食文化について、さらに、それにまつわる問題点についてお話していきたいと思ひます。

2. 文化人類学的視点

私の研究は文化人類学という学問分野に属します。現地ですら一定期間、極北地域の先住民の人びとと生活を共にしながらデータを集め、そのデータをもとに彼らの生活誌や民族誌を書き上げることを目的のひとつとしています。この分野の研究は、2つの重要な視点に立脚しています。

一つ目は、全体論的視点や関係論的な視点と呼ばれるものです。例えば、イヌイットの食文化を調査するとき、彼らの社会制度や親族関係、宗教観、儀礼、階層、利害関係などのさまざまな社会的要素と食文化がどのように関連し、結びついているのかを検討しながら、食文化を理解するという立場をとります。そのため、ひとつの文化要素とほかの文化要素の係に注意を向けながら調査するフィールドワークが必要となります。可能な限り全体を把握して、研究対象を全体の中にある他の諸要素と関連づけながら現象を理解することが重要です。

二つ目として、文化人類学の基本として、相手の立場にたつて物事を見ていく視点をとります。特定の現象や活動を文化的な脈絡の中に位置づけながら理解を試みることで

あると言ひ換えることができます。その上で、外の視点、内の視点を常に相対化しながら、調査対象の現象を理解していこうとする立場、すなわち相対主義的な立場をとることが重要です。

これらの視点を踏まえ、本題を論じていきたいと思ひます。

3. 極北の自然環境とイヌイットの歴史

まず、極北の自然環境とイヌイットの歴史についてお話します。

カナダの極北地域に住んでいる先住民は、かつては「エスキモー」と呼ばれ、現在では「イヌイット」と呼ばれています。「エスキモー」と「イヌイット」の違いから説明しましょう。「エスキモー」という名称をさす単語は、もともと彼らの近隣に住んでいた人びと、おもにアルギンゴン語族系の先住民（クリー、オジブワラ）の言葉で「生肉をくろう」「生肉をくろう輩」という意味を持っていました。この言葉が、英語の中に入り、英語の単語として英語圏の人びとの間で浸透し使われるようになりました。しかし、1960年代から1970年代にかけてカナダで先住民運動が盛んになるに従ひ、「エスキモー」という言葉の使用に対して、当事者の人びとが反対するようになりました。民族名称として「生肉を食べる輩」という呼び方は民族を差別する用語ではないかという意見が出たのです。そして1970年代からカナダでは「エスキモー」という言葉の使用をやめ、先住民に配慮した「イヌイット」という言葉を使うようになりました。

「イヌイット」とは、「エスキモー」と呼ばれていた人びとの母語であるイヌクティット語（語）で「人びと」とか「人間たち」を意味する単語です。単純に定義すると、「イヌイット」とは極北地域をおもな居住地として、イヌイット語を母語とする人々を指しています。しかしながら、「エスキモー」と総称されてきた人びとには、地域ごとに異なる民族名称があります。ロシアのチュコト半島沿岸地域のユピット（2千人）、アラスカのイヌピアット（1万5千

人)やユピート(3万人)、カナダのイヌヴィアルイットやイヌイット(あわせて約5万人)であり、「イヌイット」という名称は、カナダに在住する一部の集団の名称です。また、グリーンランドでは、グリーンランド人という意味でカラーリット(4万5千人)を使っています。

アラスカに住んでいる人びとは、「イヌイット」と呼ばれることを嫌い、自分たちは「イヌピアット」「ユピート」であると主張しています。さらに、彼らは、「エスキモー」という言葉に対して差別用語という考えは少なく、今も「エスキモー」という言葉を使用しています。つまり、「イヌイット」という言葉は、極北地域の全ての民族を網羅する言葉としては適切ではないことが分かります。

極北地域の先住民の集合呼称として、先住民運動に携わっている人びとは、問題があるものの「イヌイット」を使用していますが、考古学者や言語学者は、従来通り「エスキモー」という呼称を使用しています。

このように、極北先住民は多様な民族群であることを認識しておく必要があります。過去200年の間に民族間の混血が進み、民族集団ごとの人口の把握は難しいのですが、現在の極北先住民の総人口は、おおよそ13万人から15万人位と試算されています。

次に「極北」と「北極」の違いについて説明したいと思います。「極北」とは人文学・社会科学的な定義です。イヌイットが住んでいる地域を「極北地域」と申します。一方、「北極」は物理学的な定義で、北緯66度33分より北の地域をさします。そこは1年のうち1日以上太陽が沈まない日や1日以上太陽が昇らない日がある地域です。このように「極北」と「北極」では、意味が違います。

イヌイットの人びとは、ほぼ北緯55度(森林限界)から70度ぐらいの間に居住しています。そのあたりの自然環境は、ツンドラ地帯と呼ばれています。陸地は見渡すかぎり高木が生えず、地下は数メートルから数百メートルにかけて1年中凍結し、夏の期間だけ地表の一部が溶けるといって永久凍土の状態です。このため地面を30cm掘り起こすにも数時間はかかります。さらに、高緯度であるため6月中旬から8月下旬までは太陽が沈まない白夜が、11月の終わりから1月の終わりまでは太陽が昇らない長夜が続きます。夏の月間平均気温は10度位、冬は零下20度以下になります。年間降水量は意外に少なく20~40cm位です。イヌイットが住む地域は、砂漠のような乾燥地域なのです。このように北極地域は低温低湿です。

次に、歴史的な背景について述べます。人類はおそらく13000年位前にはアジアから新大陸に移住していました。イヌイットの祖先は、何回かに分かれて移住したグループのうち最後の渡米グループのひとつであったようです。彼らは4500年前に北極圏に居住していました。しかし、現在のイヌイットと最初のグループとの間には物質文化や血縁関係の上でも断絶が見られます。

現在のイヌイットの祖先は、10世紀ごろにアラスカで出現した捕鯨文化をになった人びとです。10世紀以後、地球は気候が暖かくなり、北極海には鯨がたくさん生息するようになり、捕鯨が盛んになりました。そして10世紀から11世紀頃、捕鯨文化である「チューレ文化」が発生しました。しかし、12世紀頃から地球は寒冷化し、北極海周辺の海域では鯨が生息する場所が少なくなります。このため捕鯨文化は変化していくのです。鯨以外の生物を中心に、それぞれの地域でそれぞれの獲物の狩猟を強いられましたが、「チューレ文化」と比べると獲物の種類が地域的に多様化しました。15~16世紀以降にはさらに寒冷化が進み、寒さはピークに達しました。そのためイヌイットの人びとは、移動手段として犬ぞりを使い、雪の家(イグルー)を作り、生肉を食べるといって生活様式に変化しました。これが「エスキモー文化」の始まりです。18世紀初めにヨーロッパ人は、狩猟を中心とした生活を営むイヌイットの人びとの生き様を「エスキモー文化」として紹介しました。「エスキモー文化」は人類の祖先の文化のような古いもののだと思われがちですが、実はわが国の鎌倉時代以降に成立した、比較的新しい文化なのです。

イヌイットの人びとが寒冷地に適応できた秘密は、衣食住にありました。寒いところに適応できるように毛皮の衣類を身につけ、生肉や脂をいっぱい食しました。また、あざらしの皮を夏用のテントにし、冬にはドーム型の雪の家に住みました。このような生活をする事で寒さに適応することができ、生き延びてきたのです。

しかし、20世紀に入り、宣教師や毛皮の交易者、政府の役人など、外部との接触が頻繁になるにつれ、生活環境も変化してきました。最も大きな変化は、1960年代にカナダ政府が季節移動をしていたイヌイットを村に定住させてしまったことです。カナダ政府は、イヌイットの人びとに学校教育を施し、英語を教え、カナダ国民となるようにと同化政策を押し進めたのです。当時、多くの人々は、このままイヌイットが定住生活に移行すると彼らの伝統的な生活は大きく変化し、消滅するであろうと懸念していました。ところが、再びその流れが変化したのです。1973年に、ブリティッシュコロンビア州に住んでいたニスガーという先住民の古老コルダグが、「自分たちの土地の返却」を求めて、カナダの最高裁に訴えを起しました。結局、判決では先住民側は敗訴しました。しかし判決文には、国と条約を結んでいない先住民族またはグループに対して、土地の所有権は存在すると明記されたのでした。そのため、カナダ政府は、条約を結んでいなかった先住民グループと協議を始めました。そして現在のイヌイットの人びとは、土地の所有権、生業権、言語権、教育権などさまざまな権利を獲得し、補償金を受け取り、制限つきですが政治的自律化を果たしたのです。2006年の国勢調査によると、約5万人のイヌイットがカナダに居住しています。そのうち約8千

人（約20%）のイヌイットが、モンリオールやオタワなどの極北地域以外の都市部に居住しています。

4. カナダ・イヌイット社会の現状—極北地域と都市部

カナダ極北地域のイヌイットの服装について、イヌクジュアクという村の飛行場の待合室で、その様子を見てみると、彼らはジーンズをはき、既製品の防寒具を着用するなど、南の都市部の製品を利用しています。現在では、ほとんどの人は毛皮を衣服の素材として利用しておらず、毛皮服はハンターが狩猟時に限定して使用するものです。真冬に狩猟に出かけるときには、何人かのハンターは今でもカリブー（野生トナカイ）の毛皮でつくった上下を着ています。

住宅について述べますと、彼らはかつては雪の家やアザラシの皮で作ったテントで過ごしていましたが、現在ではカナダ政府が提供したプレハブ住宅に住んでいます。これらの住宅には電気が供給されています。年に1回タンカーで重油を運んできて備蓄し、村の外れにある発電所で石油を使って発電しているのです。住宅内は24時間電気が供給され、灯油タンクを完備したセントラルヒーティングで暖房を行い、真冬でも室温は25度前後あります。水は、凍結してしまうため、配水車で週1回程度、各住宅に配給されたものを使用し、使用後の下水は住宅の大きなタンクに溜め、汚水収集車で回収するシステムです。室内設備としては、電子レンジ、テレビ、洗濯機など家電製品、水洗便所や温水シャワーがあります。さまざまなタイプの住宅が存在していますが、3LDK住宅がもっとも多いタイプです。家によっては室内に観賞用の植物もあり、ネコなどのペットをかっている家もあります。カナダ南部の都会の生活とほぼ変わらない様子がうかがえます。ただし、夏には人によっては1週間から長くて3カ月にわたり、家族単位でまたは親族集団でキャンプに出かけます。そのときは2メートル四方のキャンバス布地製テントで過ごします。ちなみに現在では、道具の制作や裁縫など伝統技術は学校教育を通して古老（祖父の世代）が孫の世代に伝えています。

イヌイットは、住宅の室内冷凍庫に多くの生肉を保存しています。通常、祖父や祖母が同じ村に居住している場合は、子どもや孫たちが親や祖父母の家を訪れ、一緒に昼食や夕食を摂る傾向にあります。食事内容を見てみると、アザラシやカリブーの肉、ホッキョクイワナという魚を切り身にしてアザラシの油につけて食べています。それらを煮て食べることもあります。後でも述べますが、最近ではカナダ南部やアメリカで製造された加工食品の消費量が増加しつつあります。

イヌイットの人びとは捕獲した生肉をほかの人に売って現金を得ることはせず、親族や村びとの間で分け合います。狩猟・漁労により食料は確保できても狩猟による現金収入は見込めません。しかし、狩猟・漁労をするためのスノーモービルの燃料を買うためにはお金が必要です。そこに現

代のイヌイット社会の矛盾があります。現金収入源としては、村に存在する公的機関や生協などの仕事から得る賃金、高齢者に対する年金や政府が提供する各種の生活補助金などがあります。また、現金収入のひとつとしてイヌイット・アートの制作販売もあります。地元にある滑石や蛇紋岩を用いて彫刻品を制作したり、版画を作ったりして現金収入を得ています。ハンターやその家族は、これらの収入を狩猟・漁労をするために利用しています。自然の中で生活していると言われているイヌイットの人びとも、石油燃料社会に生きているのが現状です。日常の狩猟・漁労には日本製などのスノーモービルを使い、犬ぞりはレースや観光用のみ使用しています。犬のえさの確保や健康管理など多大な労力と維持費がかかってしまうため、カナダでは犬ぞりは趣味の範囲の使用に留まっているのです。

冬の漁労は、湖水上から網をはり、自然に獲物がかかってくるのを待ち、これを2～3日繰り返す、たくさんの魚をとります。主な獲物はホッキョクイワナという鮭に似た味がする魚です。鮭はジストマという寄生虫がいるので、生食ができません。寄生虫がいないイワナ類を食用として生で食べています。

なお、私の調査地であるアクリヴィク村では、地元でとれる海獣（アザラシ、セイウチ、シロイルカ、ホッキョククマなど）、陸獣（カリブー、ホッキョクウサギなど）、鳥類（ハクガン、カナダガン、ライチョウ、ケワダガモ、鳥の卵など）、魚類（ホッキョクイワナ、コクチマス、ホワイトフィッシュなど）、その他（ベリー類、二枚貝、コンブ、ウニなど）を食料としています。誤解を避けるために言っておきますが、現在のイヌイット社会ではパンやパスタ類、ミルク、肉類、野菜、果物、缶詰などがカナダの南部から空輸され、流通しています。現金があれば、地元のスーパーや生協の店舗でそれらの食料を購入し、食べることができます。年々、外部から持ち込まれる食料の消費量は増加の傾向にあります。

前述したようにイヌイット社会では、ハンターが捕獲した獲物は食料を必要とする家族や親族、友人に分け与えます。この食物分配の慣習のおかげでイヌイット社会では、飢えることが少ないといえます。

極北地域につくり出された定住村落でイヌイットが生活を開始した1960年代には、看護師、学校の先生、警官たちがそれらの村に駐在するようになりました。そして北極圏内でも初等教育が行われるようになりました。1970年代半ばまでは、同化教育として英語を教えてきましたが、70年代以降に先住民が教育権を獲得してからは、自分たちで教育委員会を持ち、カリキュラムを立て、教育を行っています。現在、小・中学校での学校教育は、カナダ社会に適應できるように英語やフランス語を教える一方で、イヌイット語や伝統的な生活の技術も教えています。将来的には、イヌイットの先生をより多く養成し、イヌイット語で科目

を教える人材を育てることを目指しています。幼稚園から小学3年生まではイヌイット語を教え、その後は英語とイヌイット語を教えることを実践し、イヌイットが自らのアイデンティティを保ちながら、狩猟社会で生きていける人材の育成を目指しているのです。

宗教は、20世紀のはじめごろから大きく変化しました。シャーマニズム的な宗教を持っていたイヌイットの大半は、宣教師の活動の影響を受けてキリスト教に改宗しました。当時、カナダはイギリス領であったため英国国教会派が主流でした。ところが80年代から、ペンテコスト派など原理主義的な宗派が、信者の獲得を目指し、積極的に布教活動を行いました。その結果、イヌイットが属するキリスト教の宗派が多様化しました。どの宗派に属していてもキリスト教徒である現在のイヌイットにとっては復活祭とクリスマスは重要です。これらの時には、村びと全員が村の集会所に集まり祝宴を開催し、生肉や生魚を食べたり、フォークダンスをしたりして夜を明かします。しかし、伝統的にお酒を作って飲む習慣がなく、公の祝宴ではお酒を一切飲むことはありません。ヨーロッパ人と接触した後、持ち込まれたお酒でトラブルが相次ぎました。このため、多くのイヌイットの村ではお酒の売買は条例で禁じられています。

このような状況の中で、現在のイヌイット社会には、さまざまな問題が持ち上がっています。ひとつは十代の若者の自殺、それからアルコール依存の問題、最近では麻薬の問題も指摘されています。食生活では地元産のものよりも加工された食べ物の方が多くなり、加工油や食塩・砂糖を多く摂取するようになって、さまざまな健康問題を引き起こしています。イヌイットの平均寿命は、1960年代頃は40才前後と短く、乳幼児死亡率が非常に高かったのですが、その後、医療の充実により乳幼児死亡率が減り、平均寿命は上昇していきました。しかし、さまざまな健康問題をかかえ、平均寿命は伸び悩み、現在では地元の食べ物は健康に良いということ、政府も医師も指摘するようになりました。

極北地域では出産による人口の自然増加が著しい一方で、1980年代からカナダ南部にある都市に移住するイヌイットが急増しています。例えば、モントリオールには、1992年国勢調査では320人が居住していましたが、2006年には590名に達しました。イヌイットの総人口の約15%~20%の人が、都市部に移住して生活していると考えられます。私は、モントリオールに移住したイヌイットの生活の調査を1996年から開始しました。その結果、移住したイヌイットの一部は成功していますが、大部分は失業し、貧困やホームレス、薬物中毒、食べ物を手に入れることができないなどといった問題をかかえていることが分かりました。彼らに移住する理由を聞いてみると、「北にはさまざまな問題がある」「住宅が限られている」「教育機関がない」「病院もない」など、人びとを極北地域の村から南の都市

部に押し出す要因が存在し、逆に、都市には個人の自由を受け入れる風潮や良い住宅環境など人びとを引きつける要因が存在しています。特に最近、イヌイットの女性が都市部に移住する傾向が顕著に認められます。

5. アラスカの捕鯨民と鯨食文化

ホッキョククジラは成獣で体長が15~18メートル、体重が50~60トンあり、ベーリング海と北極海を季節的に回遊しています。アラスカの沿岸部に住むイヌピアットとユピートは、今でもホッキョククジラを捕獲し食料としています。彼らは、肉・内臓・脂皮、髭、骨などほぼ全ての部位を利用します。彼らの捕鯨文化は、考古学的には紀元後千年頃に始まり10世紀以上続いているということになります。

秋は日本製モーターを付けた中型ボートを使って沿岸海域で捕鯨をしています。捕獲したクジラは、村の近くで解体します。この作業には、約30人が従事しますが、解体に携わったすべての人びとに少量の肉などが分配されます。また、その場で脂皮の部分が調理され、そこにいる人びとに振舞われます。また、翌日にはボートキャプテンの自宅で村びとを対象にした祝宴が開催されます。

春になると、村の近くの海水原に沿って海が開けます。海水原の海際にほぼ200メートルごとに30余りの捕鯨グループがキャンプを形成し、ホッキョククジラが回遊してくるのを待ちます。クジラを発見すると、アザラシの皮を張り付けたウミアックと呼ばれるボートに4人~8人が乗り込み、捕鯨に従事します。捕鯨に成功すると秋季猟の時と同じように解体と分配を行ない、翌日にはボートキャプテンの自宅で祝宴が開催されます。

春の捕鯨が終わり、ウミアックを陸に揚げる時に、捕鯨に成功したボートキャプテンが一艘一艘ごとにアプガウテイという祝宴を開き、鯨の肉、脂皮、発酵した肉を村びとたちにご馳走します。さらに、6月には、ナルカタック祭(ブランケットトス祭)と称して、その春に捕鯨に成功したキャプテンが村びと全員に対して祝宴を開くとともに、ブランケットトス(トランポリンのような遊び)やイヌピアット・ダンスなどを行います。

捕鯨をするためには、グループごとに春と秋あわせて約350万円の経費が必要です。慣習や国際捕鯨委員会の規則によって鯨肉や脂皮を売買することは禁じられていますので、捕鯨から現金収入を得ることはできません。このため、ボートキャプテンと乗組員および彼らの家族は、村内の施設などで仕事をし、稼いだ現金を捕鯨のために投入しています。

イヌピアットにとって「鯨」は世界観においてもとても重要な存在です。「鯨」は自らの意思でハンターに捕獲されると信じられています。ハンターは「鯨」を捕獲することを聖なる行為とみなしています。イヌピアットは、「鯨」の命をもらって自分たちの命をつないでいるという考え方

を守り続けているのです。イヌピアットにとって、捕鯨とは、栄養価や文化的な価値の高い食料資源を得る活動です。また、捕鯨に従事し、鯨肉や脂皮を食べることは、イヌピアットとしての民族的なアイデンティティの基盤となっています。

6. 極北先住民の食文化の特徴と変化

現在、この重要な食料資源が危機に見舞われています。地球の温暖化によって海水が減少し、海底油田の開発、北極航路の観光開発が進み、捕鯨活動に影響を与えています。極北地域の食文化を見てみると、特徴は生食が中心であり、干すことや煮ること、発酵させることを除けば、料理といわれるものはほとんどありません。食事内容の特徴は、脂肪を多く摂取し、食物繊維はほとんど摂らず、高タンパク質、高カロリー食です。そして、狩猟して得たものはみんなに分ちあって食べることも特徴のひとつです。

イヌイット料理とは、アザラシ、シロイルカにしても基本的には生で食べることが主であり、干し肉は保存食として、冷凍したものは長期保存食となります。煮る方法もありますが、頻度は少なく、古くなった肉を煮て食べているようです。ただし、アラスカのイヌピアットは、鯨肉や脂皮、内臓を煮て食べることが多いです。セイウチの肉やホッキョククジラの肉などは発酵させて食べる方法もあります。アザラシの油は調味料として使用し、日本人の醤油と同じような感覚で使用しています。

イヌピアットやイヌイットの大好物には、シロイルカやクジラの脂皮を原料とする、噛んでも噛んでもかみきれない「マタック」という食べ物があります。タイヤのゴムを噛んでいるような、非常に硬く弾力のある食感です。ただし、マタックは煮ると、イカの肉の部分の煮たような食感となります。煮たマタックはウナールックと呼ばれ、イヌピアットの最大の好物のひとつです。

このような食文化が、欧米文化の影響を受け、変化しています。今まで食習慣になかったハンバーガーやパスタ類、パン類、パノク（小麦を揚げたパン）を食べるようになり、でんぷん質や加工食用油が多く摂取されるようになりました。さらに、砂糖や食塩も多量に使用するようになり、スーパーマーケットでは調味料などあらゆるものが入手可能となり、食文化が変化し、さまざまな問題が起きてきました。1960年代の定住化以降、肥満という健康問題が発生しています。定住化後、野外での活動量が全体として低下してきました。しかし、脂肪分を多量に摂取するという伝統的な食生活の存続のため、また食事の欧米化に伴い、脂質分やでんぷん質の多い食事内容は肥満を招き、特に女性に肥満が増加しました。さらにガンや高血圧、糖尿病、虫歯などが増加しています。

7. 北アメリカの極北地域における資源・環境汚染問題と地球温暖化問題

北アメリカの極北地域では地球温暖化の影響で北極の水が溶けて少なくなり、氷上で子育てをし、生活してきたアザラシやホッキョクグマの生活は脅かされ、その数が減少しています。また、海水の減少は、ホッキョククジラの回遊ルートの変化を生み出し、以前とくらべ捕鯨が困難になってきています。そして、環境変化により、今まで予測してきた気候などの状況が従来の予想では対応できず、狩猟には予測困難な状況が出現してきているのです。また、環境汚染によって捕獲した食料の安全性が脅かされていることが問題視されています。

極北地域には存在しなかった残留性有機汚染物質「(POPs) : PCB, DDT, リンデンなど」が、1970年代から、人体やホッキョクグマの体内から検出され、さらに、カドミウムや鉛、水銀、亜鉛などの重金属や放射性物質まで検出されています。ある研究では、イヌイット女性の母乳中から残留性有機汚染物質が、ケベックの女性に比較して3倍も多く検出されていると報告しています。これらの事実から、意外な汚染源と極北地域への流入経路が明らかになりました。それは、南アジアや東南アジアなどで使用した農薬やロシア・北米の工業地帯の工場からの排気ガスが温暖化により蒸発し、ジェット気流に乗って運ばれ、北極海に降下し蓄積されているというのです。その有機汚染物質をプランクトンが食べ、さらにプランクトンを魚が食べ、その魚をアザラシが食べ、そのアザラシを人間が食物にするという食物連鎖を通して、人間の体内に蓄積されてしまうことが分かりました。流れ込んだ有機汚染物質が北極海の中で蓄積し、北極海はごみ溜めのようになっています。

しかし、汚染源は外からの影響だけではありません。極北地域内にある軍事基地や村の施設のごみや有害物質が多量に投棄されています。このようにさまざまな有害物質が、極北地域を汚染している事実が認められました。

そして、汚染物質は時間を経るに従い、動植物の体内に蓄積され、食物連鎖の上位に位置する生物体にはより高濃度に蓄積されてしまいます。その影響として、子どもが生まれなくなってしまうたり、神経系統や免疫系統が侵されてしまったりするという弊害が生まれています。最近の研究では、イヌイットの子どもの免疫機能が低下しているという報告もあります。

そのため、20世紀末には国連が中心となり、極北地域の調査を行いました。その結果、今なお以前の残留性有機汚染物質の状況は改善されておらず、水銀のような重金属類の蓄積レベルは上昇し、放射能や石油による汚染の危険度が増し、オゾン層の破壊も進んでいるという、かなり厳しい状況であることが分かりました。

北極の環境も南極の環境もデリケートであり、ひとたび崩れると元の環境に戻すためには数百年かかります。問題

は北極も南極も地球環境のバロメータであり、それらの環境が脅かされているということは、地球の温帯地域も将来的に危険が迫っている状況になることを予言する指標なのです。イヌイットは、地元のものをもって食べていますが、その食べ物が有害物質によって汚染されているのです。さらに、獲物が、地球温暖化による影響で捕獲することが困難になりつつあります。しかも、国際条約により獲物の捕獲も規制されてしまっています。このようにさまざまなレベルで、極北先住民の食の安全保障が脅かされているのです。

8. 結びにかえて

食というものは、文化やアイデンティティの基盤とされています。従って、極北民にとっては、ホッキョククジラを食べることや地元の食べ物を食べることが、彼らの文化やアイデンティティの基盤となるのです。しかしながら、極北地域における社会変化や環境問題、資源をめぐる国際政治によって、極北民の食文化が危機に瀕しています。その中で言えることは、極北民の食の安全保障というのは重要な課題であり、私たちと無関係ではないということです。われわれの生活が間接的かつ直接的に、地球全体の環境に影響を及ぼしているのです。私たちの言葉や実際の日々の行動が、無関係とっていた人びとに影響を与え、ひいて

は極北先住民に影響を及ぼしている現実を認識すべきであり、極北先住民の食文化の変化を鑑みて、われわれの発する言葉を含めて、注意が必要であることを、われわれ一人ひとりが自覚する必要があると考えます。

参考文献

- 岸上伸啓 (2002) 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題—その現状と文化人類学者の役割」『国立民族学博物館研究報告』、27、2、p237-281
- 岸上伸啓 (2005) 『イヌイット「極北の狩猟民」のいま』、中央公論
- 岸上伸啓 (2005) 「極北地域に暮らすイヌイット」、Vesta、59、p41-48
- 岸上伸啓 (2005) 「カナダ極北の先住民民族イヌイット」岸上伸啓編『極北 (世界の食文化⑩)』、農文協、p121-159
- 岸上伸啓 (2007) 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』、世界思想社
- 岸上伸啓 (2009) 「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察—アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」『国立民族学博物館研究報告』、33、4、p493-440
- 岸上伸啓 (2009) 「アラスカ先住民イヌピアックの捕鯨とクジラ料理」、Vesta、74、p54-56
- 岸上伸啓 (2010) 「カナダ極北地域における食糧の安産保障について—ヌナヴィク・イヌイット社会を事例として」上田晶子編『食料と人間の安全保障』(GLOCOLブックレット03)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、p43-59



講演会場風景